【書き下し文】

唐の鄭義宗の妻盧氏、略書史に渉り、舅姑に事へて甚だ婦道を得たり。嘗て夜強盗数十有り、杖を持して鼓譟し、垣を踰えて入る。家人悉く奔竄す。唯だ姑の自ら室に在る有り。盧白刃を冒して、往きて姑の側に至り、賊に捶撃せられて幾ど死せんとす。賊去りて後、家人問ふ、「何ぞ独り懼れざる」と。蘆氏曰はく、「人の禽獣に異なる所以の者は、其の仁義有るを以てなり。隣里に急有るすら、尚ほ相趣き救う。況んや姑に在りて委棄すべけんや。若し万一危禍あらば、豈に宜しく独り生くべけんや」と。

【現代語訳】

唐の鄭義宗の妻盧氏は、広く学問を学んでおり、夫の両親につかえて、たいそう嫁としてのあり方を究めていた。ある日の夜、強盗が数十人、武器を手に取って騒ぎ立て、垣根を越えて侵入してきた。家の人々は全員逃げ散った。たった一人、姑が自分の部屋に残っていた。盧氏は白刃を乗り越えて、姑の側に向かい、強盗にムチで打たれてほぼ死にかけた。強盗が去った後、家の人が（盧氏）に問うた。「どうしてあなた一人だけ恐れなかったのか」と。蘆氏が言うには、「人が獣と違う理由は、人は仁義の心を持っていることである。隣村で危急があるときですら、お互い向かって救い合うものだ。ましてや姑（に危急があるとき）なら、どうして捨ておくことができようか、できるはずがない。もし万が一危険や禍があれば、どうして一人で生きていけようか」と。